

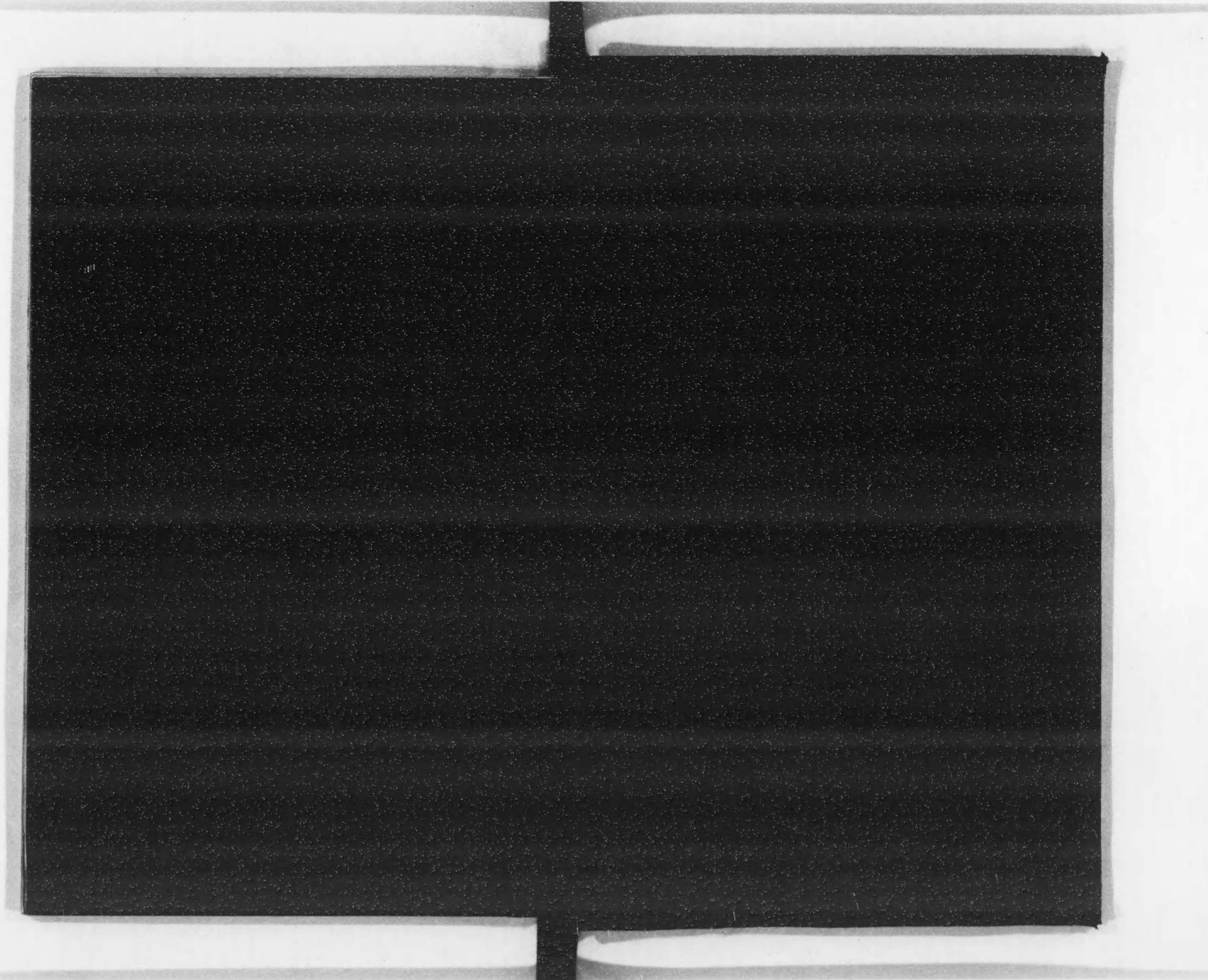
始



275
UIT

事 田 水 噴

英 語 用 精 本 叢



特114
841



坂本精市著

西曆一千九百二十六年夏

松江詩話會出版

大正
15. 10. 14
交内

坂本精市詩集●噴水の掌

全日本詩壇に送る

自

序

「詩は藝術の精華である」と、げに詩とは感情を言葉に表現するを以つて生命となし、總ゆる藝術中にあつて詩以上己れ自らの感情を發露せしむるものはない。

其れは詩を解するものの誰れも知覺するものであり、なにひと誰人も否定されざる決定的なものである。よしや其處に何ら詩の本質をも解さずしてうたはんとする人にさへ勿論又其作用は起り居るのである。さればもし人あつて「詩は如何して生れるか」と云へる間に際して一言「感情の發露」と云はずして何と云はむ。其れは實に馬鹿げた理論ではあるが、其れこそ最も重大視すべき「表現」と「内容」の根本的理由であり、しかもまた詩を詩としての脚韻の生れ出づる理由

であるからである。

詩はいたる處から生れ出づると云ふより、詩人は總ゆるものを詩に成したがるに云ふがむしろ事實とすべきである。其れは各詩人自ら知る如く例へばかの路傍に轉がる小石にさへ詩を感じ、光さへ音さへ詩を感じたと云ふは己れが詩人であればこそ詩として感ずるものであつて何ら他人をして云はしむるべき事ではない。或る詩人の「幼兒の見るもの凡てが詩であり歌である無心に物見るもの其のものが詩である」と云ふ事も詩人自身の云ふ事で世の凡ゆるものが詩人のみに與へられたるものではない。

而して畫書の「世の凡てが繪」と云ふも、俳人の「吾が行くところ皆句なり」と云ふもまた然りである。此處に於て「詩人は

世の總ゆるものを詩にしたがる」と云ふ事は當然にして亦最も明記せられたる詩と詩人の發足點の露骨の極みなる言葉である。然し考うれば、既記の如く手に持つ小石が詩であると云へば此上不思議はない、亦其の不思議なるものが詩であると云へばまたと奇怪極るものはあるまい。怪であり詩は吾が形のまゝなる映影の如きもの、また陽炎の如く炎々出する幽霊である。

故に此處に於て詩的リズムは音樂となつて現れ、一切の藝術は神經官能に刺し映じ、影のごとき句ひや美しき色を懂れ見眩ひ、個的情緒に映せる主觀の力を打ち込んで行く故に始めて象徴の名稱を告げ、句ひ、かたち、色合、音樂凡ての藝術は詩の上に於て現れ、詩は其れによつて一層の完全を成し、且つ亦其の藝術によりてより新奇なる美の探求をなさんと欲す。

詩は吾が悲しい人生記録である。詩は吾が悲しい幻影である。けむりであり象徴である。例へばかの毒々しい印度の果實であり、夜となれば椰子の木蔭に土人の吹く哀切限りなき竹笛である。

もし人ありて、余の作品をして「朦朧晦澁」或ひは「暗示的」又は「前期の作品の表面的野暴性、後期作品の内面的野暴性」と云はんか或ひは其れと逆に「明確なる印象」「赤裸なる毒舌」と云ふも余は其れ等に對して一言も逆説すべき事はない。

むしろ其れ等を云ひ示し呉れた諸氏に感謝するのみである、然しかく云へばとて批評せんと思ふ諸氏に對し右を列し呉れと云ふ事ではない。批評せんと思ふ厚意ある人は、よしや余の

作品をして反駁せんと思ふ毒舌を吐かんとする人も、必ず又前記の感想に觸れて呉れると思ふからである。其の明確なる印象的手法と朦朧なる暗示的手法の相放れたる逆現は「白」と「黒」の如く正反對であるが、然し其の兩者共吾が感情の同一なる、吾が詩風の同一なる事は勿論である。たゞ單に表現の印象的なる暗示的なることによるのみである。

余は常に或る疾患と苦悶の爲、極度なる神経質となり、何事にも感じ易く、時には官能の秘奥までも追いつめ、烈しい吾身の痛みに體の崩るとさへ思ふ。余の讀書時間は凡て午前一時二時、白日は仕事に追はれ夜業を終りて机に向ふるなれば頭惱は亂れ、詩作せんとする時は頭髮擾亂し眼は血走り惱ましくいらだ、しい體愁の呪はしさ

に吾が詩のあまりにも呪はしく惱ましきはまたせんなくすべなきあらはれである。かくも苦悶と疾患の爲、樂しかるべき余の二十代の夢は無慘に頽廢した。余は即ち其の悲哀と鬱悶の呻吟をむしろ逆に愛し感溺した。吾が悲哀も呪はしき悶絶も疾患も嘆きも余自身の詩である、吾が藝術の探求するものである。

吾が體は無慘である、吾が神經はあまりにも戰慄を創出した。余の頭には魔が住む、余の眼には六角形の化物が住む、鋭敏な感情、幻惑の奇怪なる、美がある、色がある、世様で無い物體が現れる、怖ろしい謊言、謊言は音樂となり吾が惱みとなり、外光の明快も體の惱ましきも一切異常な幻となる。毒々しい音樂となり色彩となる。吾が文字は老婆でもなく幼兒でもなき凄慘な戰慄を創し出す。

かゝるが如く余の異常の感覺が表現上に於て如何に朦朧晦澁であるか、如何に暗示的であるかと云ふは余の感情と表現がよりよく完結せられてゐる處によるからである。余の感情が特殊なものであればあるほど、其の映するものは異常である、故に表現する詞句の晦澁なる内容の暗示的なるのは當然なる事である。よしや余の作にして前記の如きを逆にせし、明確なる印象的手法によるものがあるとしても其れは吾が凄慘限りなき官能美を味はひ知り、體外の風物の印象により余の鋭針が神經に觸せるものなれば又共に余の作品にして既記せるが如く感情の同一なる又詩風の同一なるたゞ單に表現の印象と象徴の異によるもののみであるしかもまた卷中に於て其他詩風を二つに別ける事が出来る其れは「内面的野暴性或ひは呪咀」と「外面的野暴性」とである。前者の傾向は余の最近の詩風であり、後

者の傾向は其れ以前のものである。後者の以前の詩風は余の持つ腹立たしさ呪はしさを表面に現はしたものであり、前者は其れが内面の苦悶となつた傾向である。此の苦しき、痛み鋭明もなし難い五官、形は形を崩し、吾が神経のおののき或ひは呪ひを尖らし痛んだ

余の二十代の夢はかくも惨めな疾患の魔睡に感じ爛れ、遁れられざる痛恨の路に詩を託した。余の見る廻りは凡が呪ひに満ち充ちてゐる。あまりにも悩ましい外界である。呪詛、呪詛吾が一生は呪詛である、吾が世界は呪詛である。苦悶と疾患にかくも慄み世を呪ふ男、其れは誰でもない散亂せる頭髮の下に眼をむく已れ坂本精市である。人よ、嗤はざれ、盲目の嗤よ、深く深く吾が惱

みを鞭打たざれ。たゞ願はくば人よ、理解ある鞭に打ち上げしめよ打て打て、打たればとて余の不平の何とて云はれやう、鞭よ、余の半生の記録を感激せしめよ。

あ、吾が夢たれ、吾が夢たれ、此の悩ましき苦悶の日よ

吾れにとつて人世は呪詛であり、吾れにとつて嘆きも呪ひも病もどがれ難き伴侶である。

余のかくもみじめな頭悩を知るものはたゞひとり詩のみである。人よ、もしも汝が余の詩をして「醜悪なり」と云はんか、其れは餘りにも適切にして無惨である。余の醜悪的華美詞藻は爛れたる腐肉は余の美である、色彩的感覺である。哀れにも奏する音楽である。

余は此の書を以て完全に己れを云ひ現したとは断言し難いが、社会との反抗心と呪咀と其して悪魔的官能の頹廢、体内より訶嘖する恐怖的心灵、非健康、希望との逆境の苦悶、諸多の悲惨より來る感覺の眩暈は、余の精神と性格をよく現してゐると思ふ。敢て本書に「官能的頹廢、感覺的苦悶詩集」と追名したい、故に本書は彼の純情の處女に讀んでいたゞきたくない感情にある。それはあまりに恐ろしき純情の虐殺であるからである。此處に余は最大なる自信を以て本書を吾が恩師北原白秋氏に、詩作當時より迷惑を掛けてゐる佐藤惣之助氏に、且つ又吾が影倒する詩人萩原朔太郎、加藤介春、川路柳虹諸氏に捧げ、併て徒らに非力混亂たる全日本詩壇に送り、總ゆる正評なる罵倒或ひは激賞の批判を受けたいと思ふ。

大正十五年六月

湖の光る小都市にて

著者

噴水の掌目次

地獄

眞	深	深	雨	變	魔
夏	夜			態	睡
の	反			なる	の
晝	詩	夜	景	孤	邦
.....
四七	四六	四三	四二	四〇	三七

月	砂濱の精神	二五
海歴の足音	二四	
海上の精神	二五	
漁村の娘	二六	

月夜の顔

月夜の顔	二六
春光	二六
自暴な門出	二七
出もごりの女よ	二八
憂鬱ある復讐	二九

半月	二七
悲しい冬景	二八
情慾からの風景	二九
踏冬の体内	三〇
大根	三一
森の情熱	三二
飢わたる或る男の話	三三
不完全なる賣女	三四
五月の遠恨	三五
華々しい君臨	三六
悲憤めける体内	三七

曼珠沙華

吾等地上の精神	……	一八五
曼珠沙華	……	一八六
欲求せる夜半	……	一八七
新	……	一八八
菜の花	……	一八九
娼枝	……	一九〇
情熱の市	……	一九一
情慾の哄笑	……	一九二
静かなる幸福	……	一九三
石蒜に身を盛る	……	一九四
南瓜	……	一九五
晝月或ひは豪放せる序幕	……	一九六
狂人	……	一九八

魔術師の眼

日中の智慧	……	一九九
満月	……	二〇一
聖裸たる信仰	……	二〇二
情熱を迎へる	……	二〇四

紅頬	……	二〇七
紅唇	……	二〇八
影	……	二〇九
僧	……	二一〇
人	……	二一一
囚	……	二一二
老	……	二一三

四十	化粧品舗	……	二四
	或る三面記事記者の手記	……	二六
	氣違ひ雨の降る胸	……	二八
	現實の門口へ	……	二九
	解放	……	三〇
	包感せる純情	……	三一
	眞晝の思想	……	三三
	山茶花	……	三三

郷土詩章

阿羅波比の雨	……	二七
--------	----	----

新橋川	……	二八
和田見川	……	二九
普門院	……	三〇
避病院	……	三二

自序
詩集の終りに

詩集
噴水の掌

地

獄

魔睡の邦

腐れ爛れたる吾が頭惱に

何處よりか蜘蛛泳ぎ出で、いちめんの絲を張り

赤々たる毒艸の切なる恐怖に

肉をちぎりむしり喰べ食らう苦悶の黄昏。

見よ、いまだ暮れやらぬ夕焼の空を染む頃ほひに

爛れたる暗紅色の月 瓦斯の如きものを吐き

はたはたと鳥類を病ましく飛ばし

末世の極みか、

沙門の苦行か、果た邪宗なる身にせし轉宗の糺問か
誰か、吾が此の悲しい惨めな身體をしやぶり

おののける生膽を抜き取りはなち

唐國、天竺の祕藥なりと市に賣り捌かんと云ふぞ

或はまた、吾が苦悶に

吾れと吾が身を搾り血潮をしたらせ

玻璃の器に計り盛り並べ

酒になぞらへ祕かに飲み喰べんとする。

あ、彼の紅毛の宗徒の纏へる服長きびろうごを、

また華麗なる異邦更紗の手觸りを、

夢見・戀し、切に幻惑の十字架を

涙をたらしかき抱きし貴なる女性よ、

美しき顔貌に鉛をつぶし塗らんごし

すかし見ゆる玻璃の裏に

水銀を流し塗りたる四角の器に

總ゆるものを逆に映さんと云ふ。

人よ、奇なる人よ、珍らなる人よ、

吾がまことなる現れか、吾が神経の恐怖か、

苦しく、苦しく、眼をつぶし隠はんとさへしつる。

まこと、まこと、哀れぞ、まこと哀れぞ、

見れば吾が體いちめん蟲けらに犯され蝕まれ

今、黄昏の頃ほひに土を掘ち

吾れと吾が身を生きながらに埋すめんとする。

變態なる孤獨

さても忌々しい此の惱ましきは

あの怪しい夜を待ちわび

ほのぐらひ小陰に人眼を忍び

女子のごとく白粉を塗り

魚の如き肌を愛んとする

あゝ さても此の悲しいあぢきなさは

せめてものおもひに身を投げて

女學校の踏板ども腰掛ともなり

聖なる女人の足裏をなめずりしやぶり

ほのかにかぐはしい匂ひを嗅ぎたいのだ。

雨景

地面からいつさんに

銀に走り昇る鋭き魔物め！

小石をはねのけ

花羞かしい娘の唇を突き刺し

天に走り昇る怖ろしき魔物め！

見れば疾驅する青き自動車の

或ひはまたかの銀光色に濡れたる人間の

貴様の裙裾を取らへんと

魚のごとく天に逆昇るでないか

あゝ 地面いつたいより天に走り上る雨々に

街燈は吠わ怖それて樹木にすがりつき
つらぬかれたにんげんの眼が
腐れ葡萄のごとく流れこけ
娘達の 雨にはね上げられた赤い腰巻が
ひよろひよろごよれけこけて
ひくくたれ下つた天をさゝへながら
あやしくふるへる聲をはり上げて
あはれにも、天にうたごゑをつぎ込んでゐるぞ。

深夜

深夜、吾が體はかくも歪みほゞけ
かんなくすのやうなべつどの中に臥し歎き
ねぢけくされた腰の惱ましさをどうして
どうして呉れやうぞ、
深夜、吾がもたげた眼に
怖ろしく天井がさかさまに生ねひろがり
赤く口をひらげて宮守がべつたりとくらひつく
夜々は惱ましく老ひふけて
猫のまなざしがじりじりと油を嘗めずり上げ
屋根々々の薨が一枚づゝ天井に昇らんとする

深夜、吾が幻覺か、果た恐怖か

古壘の破れに眼が、手が、足が、血が

殺人の如無慘に ばらばらに現れ

吾が頭惱を無茶苦茶に

奇異なる猫獸の爪のごごひつかゝんとするぞ

あゝ かゝる深夜、身はやるせなき苦悶に犯され

此のたゞれたる胸の上に

昔 不吉だつたまつくるの鴉を

自らまねき身を投げて

肉をくらひ荒されながら

已れ生きながらの墳墓となさん。

深夜

——反詩をおもひてものせるものなり——

さよふけたる吾が惱みに

天井裏に伸び上る體を

きりきりと執念の青大將がまきしめて

血みごろに吾が鼻を何者か、

何者か囁じる音の聞こゆ。

眞夏の晝

唇の赤さが玻璃器の中で重たく濡れ

御婦人の手にコオヒイが灰になつてしもう

見れば窓硝子の破れより

太陽が狂ほひ轉ろげて

落雷のやうに苦熱をひらげてしもう。

聞け、遙か何處かに犬が黄色く吠ね

汗みごろのちやるめらが鳴いて行く

しんかんこ、ねばつこく、たッ一つ鳴いて行く。

欲 求

不可思議なきりしたんの魔法なる幻惑でもあるか
肉をくひ、血を吸ひ上げ、

俺の腰にはいちめんからたち茂り

怖ろしい病にびたびたと體中おかされ

黄いな、黄いな、身邊の花々を數へた。

あの病氣の犬に吠わつかれ

この生きたるおくつきより

からたちのとげに眼をひつか、れ

せめてもの希望に黄いなる花を

いつしんに、いつしんに

そのきなるはなをておらんとする。

吾が奇怪

何時しか吾が眼には蝸牛かたつかりのうごめき

銀色になめくちの唇をはひ歩き

體一面きのこの類が生き群れた。

此の悲しむべき無惨な體に

ぶつぶつと掌は穴を開け

頬よりは一莖の毒艸が花結ばんとする。

見よ、かくも爛れたる吾が奇怪に

怖ろしき風景を見んと欲する眼よ、

闇黒の中のごと光る眼よ、

其のしたゝれる涙を壺うつはに溜めて

かの戀人ひこの化粧料けいしりょうとなさんぞ

あゝ 身もびたびたにくすれ

一體吾が幸福を何處に求むればいいのだ

あはれ、あはれ、蝸牛かたつかりやなめくちなめくちに食ひ荒らされ

身は死ぬ思ひに感溺かふし恐怖おそれ

またも またも、蝙蝠こうもりの類に喉穴はいちめん

がさがさと羽ばたく洞窟どうくつとなつてしまつた。

怨 恨

皿の上には怖ろしき眼が一つ
俺の眼洞から抜け落ちた眼玉がころがり
かばかばとひからみたゆびの間にふほをくをはさみ
吾れと吾が唇をさあて喰べ食らつた
あゝ抜け落ちた吾が眼、
喰べ食らつた此の悲しい怨恨に
あふりおつる涙を
溢れ落つる涙を灰の如くのまんとする。

七月の風

油の如くねばつこく
紅^{あか}ひ七月の風が吹く、風が吹く、
印度の椰子蔭に鳴らす蠻民の笛音^{たけぶね}を
古びた壺^{うつは}を抱ける南國^{みなみ}の娘の唇を
果^はたまた回教寺院^{かいじん}の鐘の音をこめ
沙漠の金砂の上を吹き通し
惱ましいねばい情慾を送る七月の風が、
くぼみ呆けた吾が眼に光りたまる、
見よ、かつと映る此の街道のさなかに
黄色く狂犬が齒をむきながら

太陽を見向けていつしんに吠ゆるぞ
そして又、紅色の洋傘をさす娘の白粉を
じりじりと溶かしくずし
だらけた唇をびたびたと爛らかす。
あゝ、熱に酔ひ、うつうつと陶酔し
あの屋根に上りて赤き旗を振らんぞ
太陽に向ひ赤き旗を振らんぞ
七月の風よ、七月の風よ、
そしてまた食卓に油の如きものを喰べん
べとべと音をたてながら
あほうか悪魔の如く喰べ食らひ
云ひやうもない身の情慾に
遙か異國の匂ひを溜めて

太陽に身を溶かし
豚か馬肉の如く貞操を皿に盛り捧げん

月

暗闇の眼

一本の樹木が怖れて泣いた。

小石はじつこ

小石はじつこ

あの闇の眼にくらひつかうと思つてゐる。

地獄

(吾が怨念よ、

吾が疾患よ、

貴様は吾が一世を呪詛のろふ悪魔であつたか

生きながら地獄に身を墜す

かの怪しき傀儡師であつたのか)

あゝ 見よ

此の怖ろしい吾が肉ししぢは

蝮蛇まむしにしめられながら紫色に

呪はしい執念の想ひ故

かくも慘く蟲けら共にさいなまれ

はたはたと鴉共が羽ばたき群れくらうでないか

骨々は痛みばらばらにとけくずれ

腐肉の恐怖れにじつと

たゞじつと睡のみが光るだけ

あゝ、此の疾みし腐れたる肉よ

きしり廻る火車に身を二つに割り

たらたらと血を、たらたらと血を、紅き血をしぼり

吾れと吾が苦悶の墓標を塗り流し

怪しく美しきかの蜥蜴の類に

さけたる肉のさなかに血を吸はし

せめても怖ろしき吾が身を表象しやう。

女・唇

べつとりと、べつとりと、紅く爛れて、腐れて

お前は林檎を喰べてゐた。

哀れ、美しく鋭く腐汁の落ちて

吾が體の腐るなる、腐るなる。

けはひ

肌、怖ろしき青き肌よ、

魚のごと光るおそろしきまものよ、

鉛の粉を器にとかし

べとべとこ塗る女の肌よ。

見よ、彼の肌にくすれより

水が流るぞ、水が流るぞ。

黄 昏

黄昏が来た、怪しい黄昏が来た

盗人は假面を掛けはぢめ

花嫁は地獄のやうな行列に

白馬につながれ息も絶わ絶わにおくられる。

黄昏が来た。怪しい黄昏が来た

吾が半身は影の如くに狂され

まくろけな太陽を背にじりじりと紅く月が昇つた。

見よ、此の屋根々々の押し合ふ中を

一すじの青き、青き街路の

蛇の如嗤ひながらぬらぬらと走つて行く。

怖ろしきけもの

噴水 (A)

諸君！

あの空園の恐怖を見ないか

昇りては落ち下る水玉の

蛇にも似た執念深きまものを見よ！

噴水 一心に空に昇らんとして落つる水玉の

吾が肌を刺し 眼をつぶし

悪かにもびたびた伏し嘆く

あゝ實に悲しい話ではあるが

噴水はもう一度、もう一度、

あの天空に 雲に 昇らんとする、昇らんとする。

噴 水 (B)

闇の中に眼がある、

白く圓形の眼、

其處に細く直線に立ち昇るけものがある

鋭き闇の眼よ、

吾が神経に泌む怖ろしきけものよ、

水面より昇るますぐなる銀線がある

吾が眼を刺し

伏しては死の如く歎き暮れるけものがある

水面より天を刺さんとして昇る噴水よ、噴水よ

噴 水 (C)

憂鬱なる夕暮

水盤を叩き、ますぐなる魔物昇り

其の雫りに吾が體一面に穴を開けられ

怖ろしく見つめた銀線の噴水よ

水に濡れ、水に濡れ、白百合が寂しく咲き開き

いみじくも濡れたる吾が唇を差當んとする。

ますぐに怖ろしく昇る水音に

今、うつくと晩鶯の啼けるを聞く。

噴水 (D)

怖ろしくますますなるたゞ一すじの噴水

天を刺す水の音

したゝりて吾が悲しい胸を濡らすぞ

暮れ悩んだ薄闇の中に

疾患の痛みに肺をたずさへた娘が

痛く、痛ましく水のしたゝりに刺しつきて

吾が掌より昇る一すじの

一すじの怖ろしき、怖ろしくますますなる噴水

三月

氣早な葉花にうら霞む青空がぶら下る下

かくも構成風が帽子に頭を締めつけて

艸々の炎ゆる小徑に陽炎を割つて歩み行く

俺の孤獨の羞恥しい情慾に

せめての腹いせに唾をべつとりひつかけたんだ

見ろ、俺の顔が此うも、草いきれの蒼空色にまぶしく光り陶醉し

じりつと汗ばむ肌にうつらうつらと氣を抜かれ

馬鹿げにも狐の如く三月を食べくらつたんだ。

三月 三月 陽炎の泳ぐ散策の小徑に

太陽が大空に嘆き伏す不可思議の三月に

此の陶酔の眼に何もかも忘れ果て
豚の如くに吊り下る孤獨の情慾をどうして呉れよう。

四月

あゝ 四月 四月

俺のくぼんだ眼玉にねばつこい陽光が溜り歎き
幽鬱の櫻花に豚肉か馬肉の如くぶら下る情慾
しつこく汗ばむ肌膚を稚蛇の類に這せ廻した。

四月 四月 白鐘の授木に瘦馬が酔つぱらひこけ
毛茸の影に今日も狂人がにつと笑らつて

いらだゝしい胸を掻き亂し
くぼみほゝけた眼玉に陽が歎く。

あゝ 四月 四月

狂人か何かの如く閉ぢ込めた孤獨の密室に

黄つぱく刺激ない菜の花が浮び上り

遙か 遙か 雲雀が蒼空で

どんよりと氣の抜けた心に

惱ましく啼く雲雀の聲が、雲雀の聲が………

五 月

遙か陽が嘆き廻る午過り

だるんだ體に何時しか草の芽が崩れ出で

ちんりと毛茸の黄が痛く眼をつぶしてしまふ

あゝ 孤獨に乾芋のやうにしなびた俺の掌は汗を吐き

ぼてぼてと牡丹の紫色が情慾を盛り上げる

見よ、垣根の茂りに鶏のとさかが

紅に、白羽が、交羽つて鳴きまろび

掻き亂れた空氣に眩ぶしく顛ひ

やるせない男の體臭が鼻を叩き觸る

五月、緑と情慾の五月、五官を失ふ甘美の五月………

此の俺の疲れ傷んだ體にぎりぎりど
そ、そら、そら、蛇の眼が、蛇の眼がのたうちしめつけ
ほつとつく熱い吐息に蛙が畑一面に聲を上げる
そして又、ねちねちと吹く五月風にふきむかれた俺の眼玉を
見る見る穴を開けつつき廻る忌々しい燕の畜生め！
あ、天候は變に重たく汗を吐き
此うもやるせない男性の情慾を悩ました。
情慾の季節、甘美の季節、
地面までふくれ歪み出して
吾々の官能を無茶苦茶に盗もうとする五月なんです。

五月の雨

縁にぶつぶつ降る雨
見よ、千百の女性が躑躅の緑葉に紅唇を濡らし
俺のひがんだ心に雨の雫りが穴を開ける
其して又、じつと見つめた二つの眼玉に、そら、雨を突いて
雨を突いて燕の嘴がかたくつゝき行くぞ
あまりにも赤過ぎる躑躅の茂り
かたい燕の嘴と怖ろしい五月雨と吾が心よ
あ、降り下る雨に、今宵、げらげらと蛙の鳴聲が
雨に刺され苦しみながら
躑躅の花々を縫ひ綴り廻るだらう

怨恨の春

吾が親友^{ごう}われに叛きいさかいて絶交^{つた}んとす、吾れ吾が友
を失ひし嘆きに胸掻き亂れ、薄暮^{はくぼ}なにかはしらす涙たら
しぬ、見れば野花白く浮び上り、うらみに悲しく濡れる
たり、時葉櫻の頃にして晚鶯^{おそくひす}の聲静かにうち伏し聞けり。

何か故知らず、吾が眼玉はむかれくぼみ
薄闇^{うすやみ}の中におのき立つた悲しさは
どうして、どうしてかくも涙たらすぞ。

櫻の幹に破船の如くに身伏し
淡白き野花の茂りに頬を埋すめ嘆き
うらましく此の掻き亂れた胸をどうして呉れやう。
あゝ、悩ましく啼く鶯の聲に胸刺しつかれ
哀れ、吾が影をひきずりて櫻の葉蔭^{はづな}に
新月^{つぎ} ぼうせんとふくれかゝれり。

紫陽花

かつて幼時 闇夜に俺を怖かした魔物め！
三十歳過し淫婦の笑ひを貴様に感じ
厚き白粉の匂ひにおびわて凝視た
かくも、かくも、ぼてぼてと體を伏す紫陽花の首玉に
淫女の妄念に身は疲れ
今、今俺れは貴様を抱かんとするぞ。

雨或ひは吾が哀傷

六月の雨に體もびたびたにとけ崩れ
尻尾の抜けはじめた蛙が一面に這ひ廻り
たゞ吾が眼だけが冷たく光りむくだけ、
雨、雨、心をひねもす腐らした雨、
見ろ、いつしんに高きところに欄欄の花の
黄つばい、黄つばい、吾が病よ。

惱殺の眞夏

眞夏、眞夏、

吾が官能の疲れにべつたりと古疊の上にくつつき
汗ばんだ額ひたへを掌てのひらにべたべたぬぐひ去る

見ればだらけた眼まなこに毒々しい

あの天井やしろの宮守みやもりがねらねらと赤く口を開け

立てた人工にんこうのベニヤ板べにやまでまつ黒くろにおりくだり

汗油あせ或あるひは香油かうゆを好みこの嘗かじめすらんとする

此の熱い、此の熱い眞晝時

街路歩まちあゆむ女の鼻先はなの白粉おしろいを汗ばまし

紅くれないの熱風あつかぜが襦袢じゆばんをはたけぢやれつき

白い歪よこしまんだ足あしが光ひかりを亂みだしてねぢけくさる

ねむい眼まなこに、うつる、うつる光ひかり、光ひかり、

ねばい支那料理しなれいりの匂においひ、こげた牛肉かうにくの焼く香かほり

流ながれるヨイドホロンの醫いの匂においひ

かつと光ひかりをかき亂みだし

女の唇くちの紅い色の重おもたい此このいらだいらだしさ

あゝ首くびや股もものつけねの汗あせだまりから

ほゞけて、ほゞけて、

今一莖ひとこぎの毒艸どくしゆが生なね、

花はなを惱なやましく開ひららかんとする。

雨

びしやびしやと小石を泣かしに降りる白い魔物め！
俺の眼が次々に振かれ吊りされた雨、雨………。

晩 鶯

ほつとつく熱い吐息を破つて晩鶯^{ばんひす}が堅く啼き
而も男の胸を刺し吊し
惜春の眼玉をくり出し晒した彼奴
見よ、そら、そら、
蟲くれの穴からのぞいた眼、
空の青、青………。

夕暮・山百合

あの娘は死んでしまつた
遂にあの娘は苦悶しみながら死んでしまつた
肺を疾みし蒼白い顔貌を顔はしながら
いたく噴水のしたゝりに身を突きさゝれ
遂にあの娘は死んでしまつた
青うすくれの公園のさなかに
あのいちらしい處女は
妖精の闇をひきずりながら
涙をためて、なみだをためて、
すゝり泣きながら死んでしまつた

夕暮、鴉のごとさびしき人々の
死したるあの娘のごと蒼白めて
なにかをとらへんと手をあげる
きれぎれにさびしく手をさしあげる。

椿 花

燕のはこんで来た南國の情熱に
胸一面に生ね茂れた椿の樹木の
哀れ、ぞす黒く、玉血落ち腐れ
俺のひからみた掌をねちねちと染め上げる。
悲しくも季節の蹻音に
俺は一散にあの熱苦しい
華麗な南國の車をむちうち廻し出した。

噴 水 の 掌

噴水の掌

1

煙らつた春月の香に遙かな横笛が青い音譜を綴り
瞳を閉じた俺の胸に毒草が華を結べる夜中
俺は不可思議な和蘭陀風の舗道の上を
紅爛れた夕焼けを浴びて掌に血潮を盛り
童子等の追へる紅蜻蛉の群れを玻璃の器に描き眺むだ
いやいや其れより惱ましい春夜を綴る
あの毒々しい妖婦の唇を乳房を油に煮
其に身を染め上げ色彩つた邪心の包ひ

かくも爛り腐れた春、
呪ひも嘆かひも忘れ果てた深夜。

2

あゝ、俺の胸の肋骨のきしがひ
閉ぢた瞳を締めつけのたうつ碧蛇の斑點め！
かくて かくて 骸骨に仕立て鏤められた紅の馬車に
胸に咲く毒艸の華を踏み別き躊躇はひ廻り
魔酔た陽炎の小徑を、紅染む舗通を
或ひはかの薄暮に濡るる白色の肌あひを

否、腐れた己れの唇に實る蛇毒の上を
俺はきしらし廻らし 馬車を踏み叩き走らしたんだ。
見よ、見よ、かゝる夢睡の爛り果てたる夜中、
掌より一すじの噴水、傷心の肌を刺しつゝる。

陰影

薄暗らき宵陰の空気に

疲れた頬面にぼくぼくと穴が開き

見れば腐蝕れ落ちた椿花の香に草々生ねはちめ

毛茸の娘共が毒汁に睡をよごした

あゝ薄暗らき宵陰に血を冷笑ふ兇器のおののき

或ひは又女の惱ましい白い乳房がふくらみ上り

今にも田圃の茂りから、あの、

あの恐ろしい魔物の蛙がはひ上り

しわがれくぼみ 見るも無惨な俺の頬に遊ばうとする

あゝ 宵陰み青き毒草の間に

病み疲れた感覚に、しらじらと、走り通つた狐の足裏が、白毛が、

行くは行くは魔性の邪念、

歪みほゝけた唇をじりじりとなめづつて行くぞ

見ろ、かくも惱み疲れた陰影の想ひに

唾は怖ろしい地面に陰謀をたくらみうがひ落ち

甘く癩れ欠けた三ヶ月がぼんやりと

ぼんやりと宵空に光を溜めて歎き伏しちまつた。

藤 華

つららに下つた紫房しよさの情熱よ
俺の此の悲しい晩春はるの傷神を
貴様の卷蔓まきにぎりぎりと締めつけて呉れ
あゝ ぼてぼてと情熱を紫色しよくに燃やす藤華とうかよ
忌々しい怨恨に齒噛みした俺の心を
哀れにもなさけなく吊り下げ晒して呉れ。

薊

娘よ、狂人きやうがひの娘よ、
もうお前の探す彼岸花きうねはなはごつこだつてないんだ
あの毒々しい彼岸花はなは俺の悲しい思出だ
娘よ、俺の體を見て呉れ
かくも身體かみだじゆう中どげにくねり上り
華々しい吾が愛情の炎も
赤い吾が青春はるの情熱も
たゞ紫色に爛れほゞけ
お前の探す彼岸花はなを喰べ食らつた思出に
此のとげとげしい體をどうして呉れよう

娘よ、狂人の娘よ、

お前が放心におびわすくんだ焦點の薊は
かくも悲しく涙する俺なんだ。

牽牛花

太陽が咽喉の中に死んちまつた、畜生め！
天井の宮守を喰べた女だ、お前だ。

嬰 栗

魔睡濟の香か果た阿片の恐怖か、
ねばく五月の陽光を狂るはして
かつこ深紅の唇をさしむける熱苦しい情熱よ
むせて、むせて、吾が眞晝の幻覺
怪しい殺人に乳房を想ひ
阿片の魔睡にくぼんだ眼洞を考ふる此の疲れ
かゝる放膽なる情慾に
見よ、唇は毒藥の仕に歪み爛れ
嘆き伏す眼に
最早、ほろほど、ほろほど散らんとする。

悲しい虐殺

今宵も、蒼白い水氣に體一面浸し犯され
遠い松林に見るどもなく月が脹らみ上つたんでないか
俺は此の夕暮れ、
落葉の如く朽ち果て身伏し横たへ
静かにも怖ろしく生きたる身骸を洒し腐らし
遂に、遂に美麗なる蜥蜴の類共に
肉深く喰らひ荒されたんだ
せめても森の童子よ、
妖氣ある日本乃笛を吹き鳴らして呉れ
俺は此の無惨な肉體を今宵も開けひらげ

寂しげに群れた鴉共に啄かしほぐらして
痛み腐れた體を此處等邊に觸り感じ
悲しい怖ろしい己れ自身を虐殺に吊り下げてしまおう。

鴉

夕暮、悲しげに群れ鳴く鴉よ
森の樹影に鳴き呪ろう貴様の黒姿に
ゆんべ、嫁入りの祝宴の歸路り
酔つばらつた百姓共の頭がふるへて群れた。
俺が悲しい眼玉を剝ひた鴉共、
ほり荒らされた無茶苦茶の頭惱はかくも腐り果て
雑艸の生ね茂つた頭惱をどうして呉れやう。
鴉、鴉よ、見ろ
今宵も貴様の鳴聲に
赤い新月がづきづきと木枝にさし吊らされちまつたんだ。

病體の春

かくも赤く爛れた掌に狂ほひ歎き
何時ともなく體一面、毒紅茸の茂り群れたは、あの、
あの俺が自棄の惱みの熱病みだつたか
女よ、俺が貴様の匂さへ知らぬあの昔、
昔、遂に俺は生ね始めた毒紅茸の匂に熱病みちまつたんだ
狂るめき呪はしい紅ひ春爛の嘆かひ
夜は夜で雪洞の綴る白狐の宴を感じ
ぞつとして恐怖に眼視つた血の呷き
あゝ、此の自棄の惱みの病體を、せめて、
せめて毒々しい毛茸の黄汁に染め上げて呉れ。

春野

怪しい夕暮に體が浸りはぢめて
熱病む太陽がまつ青な竹林に嘆き伏しちまつた。
唇には夕闇を擱かんで紅の花が咲き出し
おびねた瞳にするすると金縷の蜘蛛が泳ぎ
最早夢の象徴の月さへ頬に現らはれて
真白い掌面に俺を媚戯した貴女の像が浮び刻る。
暮春、暮春、俺の體の惱ましきは
仙人にのそりくと藝をつれ出す心法、
女よ、俺の手掌の可愛い女よ、
お前が其の怪しい魔術に

俺の唇に稚蛇を戯ばした爲
かくもべらぼうな此の薄暮
血眼に季節がむちやくちやにそゝり立つちまつたんではないか。

川 邊

(あゝ、幼時 石原に腹を鳴らしながら
怖ろしい小石の眼に憑れ病んだ此の體よ
今も怖ろしい陰謀は
長々と水を流し 魚は小石に靈を植わつけ
俺の體を骨もばらばらにくひ散らすんでないか
川、貴様こそ怖るべき深夜の衣裳である)

ちびつとかけた月に小石が眼を剝き伸び上り
怖ろしい魔精の魚はじりじりと木に乗り上ろうとする

畜生！ 俺の胸に憑いた悲しい呪はしさは、あの、
あの幼時に病み疲れた小石だつたか
くら闇に伸び上り邪計ろうとする小石ども！
吾がいたいけな純情は悲しい首途であつたか
見よ、俺の體に妖精は踏み込み抜け荒し
川邊に一面闇の眼を植ゑ立たした。
此の祝ふべき悲しむべき首途の怨恨に
あゝ、忌々しい呪ふべき就念の眼に
吾が一生の神々として祝盃を
まつり捧げから碎き魔精と共に乾杯しやう。

霖 雨

憂鬱な霧雨に

終日 げらげらと耳の中に蛙共が巢を造り
寂しんだ腫に痛くつきつきと
紫に炎わて杜若がいちめん繁咲むれた。
哀れあれ、昨日も今日も
陰惨なる雨々に

泣き濡れて、泣き濡れて、
蜥蜴蛇の類に肉もびたびたに犯されてしまつた。

猫 ● 猫

垂直に怖ろしく棕櫚の木は立ち上り
惱ましい猫の尾先が 月光にぬらぬらと妄想を焚上げ
かのまつ青な棕櫚の葉に春月がひつかつた
あゝ、貴様の其の歪みくねつた股のふくらみ
貴様が母親を犯したる 怪しい可愛い吾が聖なる白毛め！
見ろ、地面の小石さへ貴様の影に踏まれて伸び上り
俺の心さへ棕櫚の葉影に情慾をひつかかけやうとする
猫、げおげおと鳴き交す猫よ
春の夜、俺の悲しい傷心が
左の脇腹に癬の如くに浮び上つたのを知るはしまい。

魔 睡

深夜、吾が體は怖ろしく頼れ初め
毒藥の苦悶に吾れと吾が身をひきちぎり
青太將や宮守の類共に食ひ荒された。
見れば肉無慘に蝕まれ
毒血の匂ひにござうして
此の體をござうして呉れようぞ
あゝ、かくも惱ましき五官の恐怖に
深夜、此の屋内
吾が掌に戀人の血潮を流し
己れ自身、黒髪を燃料に火をともしてしまおう。

古 壺

空には四角い満月が煙つてゐて、抱ける古壺には何時ともなく雫る
已れの血潮の爲に紅に染み盛られ、地獄極樂の繪が赤々と塗りた
くられ、あゝ何處かで惱ましい孤獨がざりざりと鉄鎖に締めつけ
上げられる。

俺の抱く此の奇怪な古壺には、古びた壘に寝轉ろび見た、繪本のだ
つきのお百や八百屋お七の幻影が刷り込まれ、或ひは可憐ないじ
らしい娘共の犯された唇が、じりじりと息を吐き浮び上り、不可
思議な古代の表象文字に神経が藍色に突つ立たあ。

此の壺を抱ける掌は、最早爛壞に喰付き疲れて、口の唾の重たさに
唇には蝸牛が動ごめき毒を吐き、月光に悲愁しい情慾を焚べたん

だ。

壺、壺々々。血潮の響を聞きすまし、古壺より上る紅の噴水に身を
浴び考へ想つた。 壺、此の不可思議の古壺よ、俺の悲愁しい
孤獨の感情よ、如何に惨憺なる俺の伴侶よ、あゝあの恐怖の血潮
の悲呻を今宵も今夜も聞かんとするぞ。

「噴水の掌」詩稿の上に

狐のやうに呪ひつくした紙上の巢窟に

俺は一體何をたくらみ何に魔されたんだ

冬月にがりがりど齒噛み眼をむく鋭ひ小石、

燕がはこんで来た南國の椿花や

南風の吹く 切り吊らされた馬肉のやうな情慾を

或ひは俺の血潮の音や娘共の黒髪の匂ひ

はては廻り行く季節の萬華鏡をさへ

蛇のやうに執念深く纏れほぐれ

魔の如くひとつとらへ する／＼と叩き込んでしもう

あゝ、此の感覺のいまいましたくらみに

詩稿よ 詩稿よ

俺は詩句の一つびとつに魂も抜かれほうけ

痲痺れ身切り想ひさらばいた體を

汝が上に 汝が上に崩け身伏してしもう。

羞かしい肌膚

殺人犯

まつ青な夜中、月は噴水の尖端に腐り爛れ
硝子の舗道は殺ちけたしやび悲鳴で一ぱいだ。

白い 白い彼女の小指の傷心故に此の俺は
萎びて麻痺れて投捨られた朝日の吸殻、

俺は兇器を覗き の邊りに殺ちけちまつたんだ。

探偵共！ 此の破れた硝子板に追つかけるがい、
俺は覆面を捨て血に濡れた屍を抱き馬尻を背搦ち

三角に尖つたまつ青な月光の中を走り逃く、見ろ、
かくも戦慄た夜半、草々は寂しげに濡れ

玻璃の胸より昇げた噴水に 月が霞んで碎けらあ。

仙人掌

じめじめと南風が吹くにさへ此の體

べつこり肌から汗ばむ日光にかつこ花を開らき

青空にふんぞり返つた様を見ろ

春、春、ざざざな俺の體を締めつけ押し開けた太陽様が

馬鹿げにも煙ぶらひうろつき廻らあ

あゝ君一寸、

此の俺の體を搬んで呉れ給へ

あの南の化粧室の方に、寂しい孤獨の方に

體愁の告辭

おれ、今日俺は魚屋の男となり魚となり

此の俎にぶんとする腐れ鯛の五六匹

眼玉の抜けた魚共をばさばさ料理けちまうんだ。

鱗なんか乾干みて、こう、日向に投げ出し

よれこけた尻尾は天井裏に張りつげ叩き込め

青大將でも居たら巻きつかしやうと

素晴らしい變態に陰計む俺の呪心なんだ。

兄貴！骨の抜けたるこいつ 此の屍骸を

太陽を面にぐつたりと情無く店先きに吊り下げて呉れ。

男 地 獄

腐れ賣女の吐息を感じた悲しい男性よ！

地團太踏んだ觸杯の中に

貴様を手玉に取り投げた貴女の指先が

じりじりと碧蛇の如くに締めつける。

貴女が 貴女が煙管に火を燃やす流眸に

たまらなくふらふらと雁首にのさばり込んだ此の男性一匹を

はぎやあやめの如く燻べる貴女の手腕こそ

手腕こそ拜み讃むべき陰性ぞ

あゝ べらぼうにも男を手玉に投げる貴女の流眸に

觸杯の中、仕方なく仕方なく溺れ死にそうだ。

觸感せる靈臟

緋色の百合か何かの咲いた花と緑の茂つた沼の汀

華奢な白い女の乳房が青蛇に絞めつけられ

風さへちやちやれくさつて 忌々しい口一ぱいの唾

見ろ見ろ、かつて彼女の化粧室の匂ひが

優雅な且つ大膽な愛戀の花文字を幕開たんだ

あゝ 此の俺の唇や瞳の何げない觸感や視線に

女の唇は少々羞かしげに

乳房は倒れて白光しり

此の吹く南風がよつばと癩な終幕を閉らあね。

化粧

女よ、女よ、貴様の其の青艶い肌故に
貴様がひらけた情慾を化粧にこきませ匂はし
ほつそりと捧げまつたなまつちろひ指ばつかりに
なまぬるく其の惱ましい恥かしい現野の一望に
飛んでもない俺の唇まで干からび上り
のさばり死んだ俺の悲しい様を見ろ、
女よ、女よ、其の塗りたてた呪はしい假面を
俺はせめての腹いせに
剝ぎ古びた鏡の面に
豚の如くに叩きのめしほつたらかしてやるんだぞ。

孤愁の春

南風のねばつこい情慾が唇にこびりついた正午
太陽の光線に俺の首玉がちたばたと締めつけられ
遂に古びた床板にしびれてしまつた。
此の俺のやるせない情慾、此の寂しい孤獨、
南風が運んで呉れた唇いつばいの惱ましきは
あゝ、あゝ女の香さへ遠々と遙かな踏板に
淺間しくもふんぞり返つた俺なんだ。
せめて せめて此の寂しい唇を果實になぞらへて
料理皿に盛りながら静々こ
ほつそりと羞かむだ花娘の食卓にはふつて呉れ。

屋根裏

おいぼけた鼠がいちめん
俺の眼玉をくひしぱり
鼻や額を魚の骨々の如くに喰べ散らしたんだ。
ひがみいちけた悲しい心は
けふも けふも べつたりこ
古びくされた屋根裏より蒼白い手をのべて
哀れ悲しく赤き旗を振る。

羞かしい肌膚

——北原白秋氏に捧ぐ——

其の時戀人は乳房を體內噴水にひらめかし
血はしめやかな空氣の中に、唇に流れてゐた。
煙のやうにぼんぼん鳴つたびすどるに
あの心臓の窓硝子を叩破し忍び込み
いまいまして軌道を走せ行く犯人に
探偵は破れた乳房を顕微鏡に歪めた。
畜生！ 探偵の顔が眞黒に想ひにふけくさつて

惱ましい深夜に祭禮を遊ばした戀人の死様め！

おゝ あげた俺の手先が蒼白く腐つてゆく。

ある情體よりの夜景

あまりに情熱の孕むだ唇の爲に

娘は母親に叱られ淨青な月光に泣きぢやくり

足陰には草がちびつと恥かしくふるへながら

其の足の汚匂を神聖に嗅ひでたのしみ

肋の一枚々々を數へる可愛い奴め！

聞け！ そら、俺の娘は胸の響を叩いて

夜中 赤い夜衣に神経を走り昇り

聖な不淨な妄想を刈りたくつちまつたんだ

あゝ 飛んでもない此の情體の夜景なんです。

動物園

あゝ 此のむなしい檻の中
腐り摧けた蜜柑の味に腹を満たし
食ひ散らした豚肉の屑影にぎりぎりど歯噛みした。
しよう事も無い鉄網の空間から
喇叭を投げ出す奴がゐるばつかりに
四角い天井に眼をむきながら
ビイビイと陰計の想ひを吹き込め吹き鳴らした。
此のむなしい踏板に歎き伏した俺
あゝ 吊り下げられよれこけた俺の腕をすれすれに
美しい女の唇が紅々と眺めてゐた。

南風

汗ばんだ鼻の白粉をそつとコップに透し
コオヒイに唇を汚した正午の飢さは
令嬢よ、用心するがいい
初戀なんかかけがれ古ぼけた春日、
貞操がきやべつの皮と共に溝に捨てさらされる
南風が吹く、肌をなめづつて吹く、吹く。

娼婦窟

吾が見る廻りの薄暗れた闇に崩れる偶像一面よ
貞操なんか汚らはしく

馬肉の如くに吊り下げ晒し

かしくも神様を腰巻に包み讃へた聖なる女人よ

崩れるは崩れるは、しびれすくむ偶像一面、

手さぐりにほりあぐんだ肉慾の觸感、

なめずつた獨酒の香りが唇にねばりついた體熱の惱ましさ、

肉の喰かひに切れ上つた小股の根本は

狐の如くに光を怖れねちけ歪み

赤裏の寝巻に神聖な喰物を盛つた。

哀れ、因襲の夜陰の頃ほひ、崩れ、頰けた肉の
異性の可愛い歪んだ手首が乾干し上り
聞け、そうら、そらそら
血の音を、血の響を聞いて、聞いて……………。

農夫と漁夫

農 夫 (A)

絲車の響に 鶏は木蔭に羽交つちや鳴きくさり
惱ましく春書が癖の頬面に 或ひは畑に炎ね上り
黒眞の農村問題が農夫の頭に無茶苦茶に閃めいた。
此の下ン田に突込んだ足がくぎり染め上り
明るい時雨に花嫁は

毛むぢやにしやべり光らして

びしやくと田の水を通くお狐の足の裏よ。

眼、眼、眼はひしがれ太陽に怖れ拜り捧げまつり

地面が少々飛んでもない方に傾き歪み、あゝ

あゝかくて農夫は四季の花氣を感じ憑かれたんだ。

農 夫 (B)

虚の空に浮び上つた晝月、あの眞白な晝月、
一生けやつを瞻仰て

思想も信仰も土に捏ね上げる農夫なんだ。

あゝ、ごちな蛙が 光つた鉞に切斷らうが

情人がいかに殺風景な情愛を嘆かうが

農夫は一生此の晝月に呪ひ伴侶れてるんだ。

兄弟！ 鮮かに怖ろしく静かな執念深い天上を仰げ

農夫の自然の信仰すべき神像だ旗印だ

さあ其の土塗れの衣類を地上凡ての主宰として

俺達の胸に、晝月を倒にぶら下げるんだぞ。

農 夫 (C)

膨み上つた新月の影

激しい小便に野菊を倒し

さてお歸りになる農夫の股つくらを見よ

見よ星空の下に洗ひ清めた毛むぢやの腿は

此うも土片に塗れたんでないか。

藁屋にや、嫌は嫌でちつと低い鼻を嚙りながら

灯陰に蚤を腰巻を開らげ拾つてらうし

寝巻は神聖に、歪んだ足の具合を感じてるだらうし

あゝ、此の無茶苦茶な妄想をどうして呉れるんだ

おゝい、畑に立ち上つた農夫諸君！

野原の思想ある此の感情に
あの夜中ひそかに羞かんだ禪襦を
鍬にひっつけ翻かし
藁屋に向つて一線を描んだ。

農 夫 (D)

重い山寺の夕鐘が村から村に涙を垂れ廻る時
少々歪んだ畑面に 燻り蹲まる農夫を見よ
顔一面さゝがに糸にまかれ

崩れ破れた偶像、偶像体内軌道一参に走り廻れ！
じつと土に耳を埋ひ、匂ひ嗅ぐはした思情、心め
地上凡ての毒血をしやぶり吐かせ、かれを願ひ
あゝ、水車小屋の爺さんが蛙の聲に憑かれ
農夫が土と太陽に古びた精霊を感じるのを
俺は彼等を木串にさしつけ解剖するんだ。

農 夫 (E)

空にびちびち啼く雲雀に
畦のきんぼうげを 煙管の口から紫に燻らし
わらく貴ひ小作問題のせい故に
貴様の眼玉や掌が鮑屑のやうに乾干し上り
きんぼうげやおにあざみの匂ひを嗅ひだ思出に
四季の花氣や 華々しい蛙の凱歌に 魔の如く憑かれたんだ、
此のつららに下つた畑の情熱 無茶苦茶の妄想は
如何に 如何に毛茸の仕業であつたのか
あゝ、毛茸の花粉に萬華鏡をあやつる陰謀こそ
實に讀むべき吾等の主宰、無智で純聖なる神々ぞ

馬鹿げにも待ちあぐむ收穫の秋を
貴様達はごんなに執念深く 寧ろ怖ろしく呪はしく頭惱を亂してゐるのか
うつとりと煙管の口に花粉を燻べ
幸福で不幸なからくりの田園が、今に、
今に可愛い地主のふところに飛び込み行き
田園の赤旗に伴はれながら凱旋するのを
うつとりとうつとりと花氣に酔ひしれ
不思議に惱ましい南國の風をひきすり來り
時には嵐の青い馬車に電光を乗せて
氣も抜け爛れ 偶像のやうに崩れ眠りむさぼりくさつた
おまへ、あゝ、地主への凱旋の收穫にうつうつと眼玉をひ干し上げ
一つひとつ數ぞへ計る煙管の紫煙から
今夜、憑れ者のやうに狂ほひ廻り、あの、

あの烈しい呪はしさから
くぼみ抜かれた串刺しの眼玉に怨恨も遙か
悪夢は悪魔の如く妄想を蹴破り
し•の•の•め•の•方•に 赤い旗印を破り散らすんだらう。

農 夫 (F)

素純な緑の中の農夫よ
君を見る情感は荒大がまっな老竹おひだけ
稲葉を噛み 華麗な遠景を纏ひ
昂り輝く創生の力、又ゆるい貪慾なる憂情の農夫
花園の中に負けず炎きわたる黄金きんの雑草は
農夫よ、君だ。

村 童

豆程のちんちを土に塗らし、土龍の穴をひつくり返す村の童
華美くしいお姫様なんか黒土にこきませ
穴を掘つて、村童の猪の子征伐だ

あゝ、あの蟲齒の痛み故、

釣りし蜻蛉の眼を抜切り

脹れかゝへた頬面に、無茶苦茶に塗り附けた日

狐の宮殿の座下から魔性の白毛を飛ばし

童の心に鳴いて吹き込めた出發の祝祭だ

おゝ、おゝ、土龍の限りない穴

つららに下つた野純よ

現々と描き浮んだ已れ自身の幼時の幻影、
光を亂し鳴いて轉ろび廻るちやぼの中、
おゝいおい 畑のおつかあしつこだあ——

漁 火

岸邊に眼玉を剝き 而も海浪の白裳にちやれついで
今夜も幽靈のやうに月を呪ひ隠した小石めら！
見ろ 見ろ 眞暗な沖に漁船が火を焚き上げて
古い亡霊や海魔共との酒宴を張つたんだ
漁夫よ、凡そ貴様の其の古代めいた妖火に
幽 船や海王の を呼び集めた夜中
歸りは海邊の小石共に喰らひつかれ
浮び出た星共の流れに奇怪な笛の音を
眞暗な海から感じ聞くに違ひあるまいぞ。

海風の陶酔

おゝ 海風の娘、此のやうに貝殻はキラキラするし
踏むたんびに砂利共は齒がみをするし
太陽さへねばねばと蒼空に流れかゝり
俺とお前どの みまで紅いエナメルでもある事か
さ、あの深青な海の面を踏み破つてやれ
ところで此の無数の海月、此の海上の魔物共だ
せめて小石に叩きのめし

いまいましい海魔征伐の實行に
太陽の眞下 竹笛を鳴らしてぐるりを踊ろう
娘よ、娘よ、夕べお前の訪れる聲に咽びながら 二人で楽しい夢々を

纏れぢやれつき幻想を走らせながら帆立貝に浮べてやるんだ。

港 景

洋妾の腰を追かがつた亞米利加製の黒船が

古ぼけた錨を下ろしてしまつたごとん腹

三角の太陽が沖合にぶち込み沈み

胸の中には魚共の青白い鱗がきらきらするし

蟲ばれくさつた海岩には變に貝類が喰付き尖り

まごろすのすばんまで歪んで見るぎやまんのコツブの中

俺は青酒を飲みながら飲みながら泳ぎ廻つた。

見ろ、屋根艸の上から新月がよほけ上り

鷗が、白い鷗が最後の接吻を送りにひらひらと

俺の唇にひらけて下りて來らあ。

月

月に濡れ岸邊に寄り獨愁悲しめる身を想觸めり

昔、流刑人は故郷の月が戀かしかつた。

夜空の青月、己れの想文送らせよ

瞳は月を見上げ 貝類の虹夢を踏裂き

彼れは遂に小石を打ち月を波間に裂り散らした

あゝ、あまりの感情は悲しみ涙を湛むべきぞ

彼れは忽ち一點景に純真な象を拜り

讃むべき宗像に故郷への想文

身を小石に埋め

悲しい獨愁を神々の象として夜空に昇飛たのぢや。

砂濱の精神

陽も熱い眞晝間、漁村の子供は素裸体で走り出した
砂原の王者共、其の足跡を見よ、
押し寄せる展望に素純を發見け讚め
濱草でもあつたら並べて拜め 其處いらの君
さ、俺の體を埋めて呉れ、彼の足跡に埋めて呉れ
俺は眞晝、馬鹿な海邊の祭主となつて
海の素純を熱い足跡の下から數へてやるのだ。

海歴の足音

村の若者達よ 此處に来て聞け
海が無盡の樂器を打ち鳴らす所
俺達は一所に小石の音を數へるのだ
おゝ 打ち振れ打ち振れ 歴史の劔
此處からだ あの怪しい青い夜が訪れるのは
ぞら此うして砂利の間に耳を静黙せ、村の若者達よ
眼に見ぬ海の足音を數へ受けるのだ。

海上の精神

真紅な波を蹴立て、走らせた帆立貝の夢
夢は病みほけ

化身の月が海上に上つたでないか

若陰にちやぶくど人魚は鱗を光らして笛を奏げ
海に亡びた妖霊共は

大空に星となり翔け廻り

あゝ、だが然し 海上一面の俺の魂を見ろ

此の月夜、俺の荒くれ立つた歯並、手は切々に伸び
切斷された空間に べらぼうな樂器を鳴らした。

漁夫よ、漁夫よ、月體の魂を、此の無限の精神を

あゝ、飛んでもない處に建てましたなあ――

漁村の娘

砂濱にやごろごろ船體が寢轉り廻り
大空に悲しい鴉めが愛に鳴きくさる
漁村の娘、貧しい欠伸は海空に吐き碎け
其の思想は荒波に祭れ、君達は海の娘だ
嫌な想は荒波に捨てるがい、
欠伸が何を語ろうとも海は吼わ狂ふ
見よ、あの肌、黒血の肌
嗅ひだらすぐに俺達は
海の卷貝を吹き散らすに違いあるまい。

月夜の顔

月夜の顔

俺の腰の邊が變に浮かされふらづいて

舌の先に煙草の煙が何時しか砂となり

地面の小石まで犬に怖れた月の夜

俺は月の眼におびねおののき顔を觸つた。

見ろ、見ろ、彼の棕櫚のてつべんだ

俺の顔が此うもべらぼうにもつるつるとすべつこく

凡そ地上人類共にどつて平凡な 而も奇怪な様に眼をむかれ

顔が顔が、己れの顔はさかさまに、棕櫚の葉先に吊り下げられちまつたんだ。

春 光

掌にはざらざらと砂を盛り草花を咲へ
珍らしい太陽に彼女の化粧室を嗅いだ故
彼の情熱の眼を手玉に取つて碧天に投げ打ち
飛んでもない藁屋根にさへ緑艸を炎やしたんだ
見よ、此の安價ひ詩人一匹は緑艸にひつかゝり
夜は夜で朧月に情慾を蛙のやうに笛吹げ
春陽の呪嘆に此の惱ましい、あゝ、
あゝ古びた觀念、呪嘆なんかけがれた春陽、
俺は彼女とブランムデイシャンペンを抜き碎き
己れ自ら身邊吐き犯し、季節にしびれ乾盃しやう。

自暴な門出

一

古着屋の前にぶら下つた何時かの日の私の戀よ
遂に先祖から導はつた思想は今呪詛はれたんだ
私は此の呪詛に
虱のやうに巢食う玩具細工にも等しい都會の中を出發するのだ。
見て呉れ、さ、見て呉れ、
あのやうに遠く、あのやうに遠く
おゝ、狂馬の片眼をひつばたき
煤煙の中を遙かに遠く燕の如く飛ぶ私の體なんだ。

友よ、此の自暴な冒険の一つの馬車挽を祝福てやつて呉れ。

二

此の馬車跡は、見ろ此の馬車のどしやつぱしりは………
先祖からの烈しい思想は音も烈じい此の呪詛………
あ、ひつばたいた狂馬からは血が流れるが
明日にでも、あの匂はしい薔薇を
此の門出の爲に一人の娘が輝かして呉れやう。

出もごりの女よ

——ある出もごりの女に——

貪婪が奇遇に、女よ、泣き濡れる女よ
貞操が君臨した羞恥の花嫁は
どうどう此の惱ましい陰謀に泣く女だ お前なんだ
あ、悩ましく悲しい存在なき不幸な出もごり女よ
呪はしく呪はしく怖ろしいお前の悪夢は、今夜、
幽思と妖精との酒宴に
凋びたあいつの寝巻をひつたくるんだ。

憂鬱ある復讐

深紅に夕空が身を焼す時

俺の心が幽霊のやうに拔出で

變に憂鬱になつたのは

娘が裏畑に一本の緋華を刈り切つた事なんだ。

あゝ、男性の心は彼れ故に想ひ老ひ暮れた

娘の緋華刈りし手なごあらば差し出して呉れ

より憂鬱なる夕月につり下り

俺はたつた一本の花の爲に

手を嗅ぎ味はひながら

狐獨を一生の敵として復讐を謀らみ企てやう。

半月

鋭ひ半眼を空に見立した夜王よ

俺の魂なら、じつと透かして、じつと、

あゝ、静かにも頷ふべき涙を湛へて嘆くべきぞ

月よ、夜王の半眼よ、

遙かに俺の幻想は月光を辿り

白く、たゞあの女が古風に身を壺に染め

俺の魂を 悲しい涙に冷やさなけねば

貴様こそは夜空の悲劇人物となつて

冬を其處から君臨遊ばすけやつに違ひあるまい。

悲しい冬景

一體、どうしやうと云ふんだ

俺の體を走せ投げ暴れ廻り

見るも恐ろしい大風の馬車を換走んぢやないか

たゞ此の長い冬期に俺の體は眼をむき叫ち

青つばい笛を吹きごらを鳴らし、手はふるへて

あの太陽を待つ體内は最早冬に荒れすさみ……

此の恐ろしい冬景をどうして呉れやう、

俺一生の冬期め！

あゝ、貴様が俺の體を荒した故に、深夜、

夜、三ヶ月を浴びて柳の魔力を感じた事なんだ。

情慾からの風景

ぢりぢり蟬が鳴きくさる森

日向雨は狐の魔女を迎へて風行なさつた。

さあ、森の魔女よ、濡れたまんまで出て來い

其の濡れた衣に觸りたいんだ、指を、指を、

昔から村の神像の衣一枚、見よ

人間一匹は森の地面に鼻を埋め

皆の間に長々と寝そべるよ

あゝ、雫に濡り無數の茸に犯されてしまつた。

踏冬の體內

冬はしんからひつそりこして

季節狂ひの李花がひようひようど木の枝に青光り

氣違ひのやうに地面がうねくさるし

雲が女の唇を觸つて葉蘭の蔭に蹲まつた。

俺の此の影、蒼白い逆の噴水、

胸一ぱいの痛哭はべつたり癡となつて浮び上り

圓ひ地球が冬に三角に大變尖つちまつたんだ。

畜生！　とてももの事此の胸板一面、

疾蛙のやうに跳刻りかへらし

野原に飢れた捨犬の群れに投出し

悲しい骸骨を冬に組み立てて呉れ。

大 根

ばさばさとして眼を射る青々たる大根畑の中

俺は抜きん出た大根の白足を

村人の眼を憚りながら 此の清雅な戀人を

引き抜き食らひ 事も辱かしく噛み味つてやるんだ

あゝ引き抜き食らひ水脹れの大根、此の太腿

あの青空が迅雷のやうに落下する下

俺は優しい 而も大膽な戀人を抱き、俺れ

俺自身、太陽の面に干し乾む類簇に吊下つた。

森の情熱

ぼんやりとした俺の心に食らひついた紅茸

此奴だつたのか

森の思想を人心に犯した精霊

赤々と、あの昔、俺の指先に飾りつけたのは此奴だつたか

もうあの頃から

魔女は嘲笑つて心を食べつてたんだ

ねばぐとした肉體、魔女よ素裸で嘲笑へ

嘲笑へ、嘲笑へ、空虚とした森陰を突き抜かせ

凡そ心を犯され 異風な情熱を持つ者は

此の森の靈氣にふれた者に違ひあるまいぞ

あ、俺の情熱、無智の心情よ、
あの紅茸の衣裳を浴び、毒血を搾り
べた／＼に手首を塗り染め
もう一度、

俺れは森の情熱の魔女に唇接けたいのだ。

飢ゐたる或る男の話

勿論そうさ……………

俺の頬を空虚に抜かし 眼玉を日向に浴して

俺達の長屋をかくもみじめに歪めたのは

ひよろ長い真向ふの煙突に欠伸する

俺等の唇を昨日も今日も干からます太陽なんだ。

家向の溝瀆に沈んだ太根の尻尾やけやべつの皮の匂ひを嗅ぎ

此の飢ゐくされた魂 たゞすげない世界に復讐を計り

呪はしい惱ましい此の存在をやつけてやるんだ。

勿論、此の懐の兇器さへ飢ゐてしまつたら

ひからびた俺の首が地面に轉ろげて廻り

うねつた瘦せた筋脈が血を吐き嗤ふんだらうさ。

不完全なる賣女

眞丸い太陽が倒に泳いで居る眞下、俺は

俺は己れの死様を胸板一枚に張り附けてやるんだ

口に一ぱいの唾を嘗めずり、此の呪ひに想ひ考つた

何時か知らず腐れかかつたばななやみかんの味に頬を抜かれ

陰氣臭い心臓の寝白粉に酔つぱらつた

完成せる不完全なごてん腹のあの臟腑をひき伸し

野蠻と云へるより寧ろ愛情深い解剖に破り散らすんだ

あゝ、俺の此んな呪はしい想ひに

半月の夜つぱら

身は大空の妖魔共の酒宴を戦慄て感じるだらうよ。

五月の遠恨

狐のやうな毛むちやな情夢に追はれて
不思議ともつかない馬鹿らしさに窓を開ける。
お、驚ろくべき爽風と青葉の血汐よ！
瞳の焦點は鮮かな青葉と透明な風
匂はしい甘いほぐれ解けた一枚の寢床は
五月の風景の中にはさつぱり光らぬ
飢ぼつた情慾は畜生！ 徹だらけだ。

華々しい君臨

此の凹凸のせつばいまつた冬期
もうあのしがれな陰影は馬鹿げた呪
彼女よ、昔古びた肖像なんか蹴散らして
無茶苦茶でも俺の扉を開けて祝宴を張れ
俺のぐるり一面には青々たる草々生ね初め
べらぼうな蟲共に花嫁の華々しい春を開くんだ
あ、開けた新生だ、待ちわびた凱旋門だ
さ、さ、開けて開けて、此の男の性急な冬期
俺は快活で碧天の破片
さる奇異な眼鏡を覗し

眼玉をくりむき洗ひ清め、彼女と二人の馬を飛ばした
あ、此の丸い地球にひつ飛びはせ行く一寸の俺達
見よ、遂に彼女は馬の背の上に、遙か、遙か
曙色のけやつを、暖かに包み切れず君臨遊ばしちまつた。

悲憤めける體內

姿態を霜くしつとり染め抜いた冷清の水仙
貴様が其の花に冬を迎へた白つばい刺戟を
皺くちやな俺の心にどうして語ろうてんだ。
胸にかくも無惨に蜘蛛は吊り下り
明快も希望もあらゆるものは切斷され
あ、俺は此んなに冬を抱へ水仙を踏みしだき
呪咀の蒼白い惨暴なラツバを吹き鳴らし
全く此の地面いちめん
吐いて吐いて犯しつくした。

曼
珠
沙
華

吾等地上の精神

乞食だ、あの草と花とを外套こうもとした乞食の唾だ
べつとりとした夕暮、そつと埋うすめておいた唾よ
其處には明年戀人あしたあいつが像すがたを建たすだろうし
夕べ、首を擡たげた毒艸からは
村娘むすめが唇くちべに唇紅べにを搾しぼり取るだろうし……
月の夜、やがて、こつそり地に穴掘うがつた唾の靈が
烈あかしい、紅あかい、地上わんちの精神に夢を描えき
大空に向つて己おれが翼はねを一はいに翔たるだろう。

曼珠沙華

吾が幼時の花嫁、

今秋も歸つて來た花嫁よ、

俺が根ごと吸ひ食らつちやつたあの昔

今も血が此うも昂るのは、皆んなお前の爲なんだぞ

草野に哄笑ふ血色の夜及よ、俺の花嫁よ

明るい眞晝、葉蔭の白狐はお前の血を冠ろうし

娘等は憑れ者のやうに擁いて狂ひ廻るだろう。

あゝ、血を吐け妖姫！

俺はもう一度人眼を放れて

ぐつきりお前の頬に食らひつきたいのだ。

欲求せる夜半

夜半、血潮をじつと聞いてゐるあの神経だ

げに、皮上の神経こそはいたましましき事かな

惱ましい胸なら月光に濡すがいい

其したら三ヶ月は鎌のやうにひつかくだろうし

青春の幻想なら此の神経のみが嗅ぐだろう。

あゝ、より豪華な明日を待つ爲に、諸君！

彼方の夜明けだ、あの緋色の夜明だ

俺の魔を三ヶ月にひつかけ

彼の方に彼の方に

緋色の曙に踏み込み踊り込んで行かう。

新 生

思出多い春、其の怨恨にはもう飽いた
此の煙ぶらめる風景に
私は新生の次回の歎喜の扉を蹴破つた
凡てが未開の莊麗なる花嫁花婿だ。
朗らかに笑つて 悩ましい怨恨おもひでを捨て
私は新生の大國に凱旋しやう。

菜の花

陽氣な植物よ
灰ほんのりと眼醒めた娘よ。
眞晝の色好い生氣に滴り
不思議に新しい雲雀の笛に色香を感じ
幻うつろなる幻うつろなる幻感うつろは凡そ此處うつろに有る、畑の娘よ、
あゝ然し私は斯うした幻うつろな植物を喰べた爲
其の夜ごうとう熱烈なる狂人となり
悩ましくも存在なき孤獨の情靈を投げ出した。

娼 妓

彼女、淫らなるべき酒酔の男酔の彼女

暗闇と暗闇の中にいじくり爛れたる偶像よ！

あ、夢に幻に處女は淫業を君臨した

暖風みなみなるお前の職業

喜ばしきかな怨ましきかな

私は少しばかりの情慾を欲し 彼女に拜謁を給はい

色麗なる情慾なる 刺激ある空気を嗅がう。

情 熱 の 市

見よ 見よ 春霞の中に赤い慾情はぶら下り

溺愛し陶酔し私等は其奴そいつを見廻すのだ。

あ、何處でもいい 赤い扉を一寸でも開けて見ろ

其處には春情の怨恨の愛戀の切り賣りがある。

一つ諸君！

私等は戀札かろたでも占るつもりで

豚屋のやうな其の赤い世界を散歩しやう。